



開催地名：秋田県男鹿市	
開催日時	令和4年2月20日（日） 13:00～14:40
開催場所	若美コミュニティセンター
語り部	山田修生 （宮城県仙台市）
参加者	男鹿市民 100名程度
開催経緯	<p>今年度に入り、当市において同日に震度3の地震が2度発生しており、災害に対する備えは常に必要であるが、コロナ禍で訓練も実施できていない状況である。</p> <p>また、自主防災組織は、地域の安全を守るために基礎となる組織であり、防災の観点のみならず地域づくりの一環でもあり、組織の育成を促進しなければならない。当市は、少子高齢化により、一人暮らしの高齢者の増加、子供の減少は、地域の絆の弱体化に繋がっており、自主防災組織の要となる「防災リーダー」の養成が課題となっている。</p> <p>加えて、市職員においては、災害時には市内各地域において先に立つことを求められ、防災に関する知識を習得し、市職員一人ひとりが日頃から自主的な防災意識を持つことが必要であると考えている。</p>
内容	<p>(1)東日本大震災の概要</p> <p>東日本大震災は、2011年3月11日14時26分に、水深6,500メートルにある縦500キロ、横200キロの広さの海底プレートの跳ね上がりによって発生した。マグニチュード9に達し、1000年に1度の災害と言われている。1000年前に発生した大規模災害は、西暦830年に発生した天長大地震とされており、マグニチュード6を記録したと言われている。1997年に「当時の天長地震の被害を予測する研究」が行われ、全壊した戸数が約13,500棟、死者が約1,200という結果となった。東日本大震災は全壊した戸数が約13万棟、死者数が約18,000人である。</p> <p>(2)東日本大震災での体験</p> <p>地震発生時は、全く身動きがとれず、両手両足で何かにつかまっていなと立ってられない程であった。各地で地震に関する講演や研修を行ってきた身であるが、頭が真っ白になり、どのように対処すればよいか全く分からなかった。地下の排水管からは水が噴出し、電信柱などは倒壊して火花を散らしていた。町内会や自主防災組織などの団体で避難訓練を行ってきたが、家族・近隣住民など小単位で避難せざるを得なかった。津波が来ることを想定し、とにかく海岸からできる限り離れるように避難した。地</p>

	<p>震が収まった後、指定避難場所に移動したが、津波が届く恐れがあったため、自衛隊のヘリコプターで別の指定避難所まで一人一人運んでもらった。周りの人は泣き叫んでいる人が多かったため、拡声器を持って避難民を鼓舞し、懐中電灯と携帯電話またはラジオを持って行動するよう指示した。</p> <p>(3)東日本大震災から学んだこと・取り組んでほしいこと</p> <p>東日本大震災は、災害対策を決して怠っていたわけではないが、これまでの取り組みが無効だと感じてしまう程の規模であった。同規模の地震・津波発生時は、「より遠く、より速く、より高く」を意識して、まずは自分の命を守ることを第一に考えて行動してほしい。避難時には、声が大きく統率力のとれる人が先頭に立つのが良い。気が動転している人が沢山いるため、混乱している人々を鼓舞することが大切である。</p> <p>今後、実施してほしい取り組みは、家族間で(可能であれば)1部屋を「自宅避難場所」として設定し、災害時に家族が集合する部屋を設ける事である。また、避難訓練においては、男性は働いている割合が多く、災害時には帰宅困難者になる可能性が高いことが考えられるため、女性中心の訓練を日中に実施する。それに伴い、防災メンバーや自主防災会会長などに女性を登用することも必要であると感じた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>有事の際、自宅内でも避難場所を考慮すべきであることは、見落としがちであると思った。また当管内の防災組織でも、女性リーダーの育成を進めていきたいと考えた。</p>